

平成26年度雄武町子ども・子育て会議（第3回）会議概要

日時：平成26年12月4日（木）13：28～15：05

場所：雄武町役場 庁舎別館 中会議室

出席者：北畑会長、牧野、工藤、相坂、目黒、直井、齋藤

堀内（ぎょうせい）

石井課長、澤田補佐、武藤係長、佐藤係長

佐々木課長、大水係長

中村所長、八重樫保育士

豊田課長、新谷補佐、内宮係長

1 開会

北畑会長挨拶

2 議事

(1)地域子ども・子育て支援事業について（進行：豊田課長）

・資料7（新制度におけるサービスの類型）について説明。

（豊田課長、八重樫保育士、齋藤係長）

北畑会長：雄武町で行っているサービスは。

豊田課長：地域子育て支援拠点事業、妊婦健診、乳児家庭全戸訪問事業、養育支援訪問事業等、一時預かり（※事業対象とはならない）、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の6事業。

(2)子ども・子育て支援サービス提供見込量及び確保方策

・資料8について説明。（柁ぎょうせい）

【質疑】

佐々木課長：ニーズ量と実績・確保方策は目標値となりうるのか。ファミリーサポートセンターの31年度に検討というのは深い意味合いがあるのか。

ぎょうせい：目標値として見て欲しい。31年度検討は町の考え方だと思う。

中村所長：ファミリーサポートセンター事業というのは、保育所としての施設型でできているサービスというのは充実させていきたいと思っている、施設型でできないサービスと言うものがある。今までも知り合いの親御さん同士で協力しあって支えていたりとか、その辺とかを例えばうちの支援センターが窓口となって繋ぎあわせてあげたりだとか、特に町外から転入してくる方については町に全然知り合いがないよっていう時にちょっと見ててとか、そこらへんの部分をお互い支え合えることができないかなっていう部分を繋げていくような、ファミリーサポート事業ってなるとちょっと話が大きいんで

すけども、できるところからは子育ての有償ボランティアさんみたいな、そういうところから町ではできないサービスをボランティアさん、地域の方々で子育てをできるような体制をできないものかなということで、思いとして31年度で載せたというところであります。

北畑会長：16ページの地域子育て支援拠点事業の中のニーズ量として、確保方策500という数字をどういうふうにして出したのか。

ぎょうせい：おそらくそれぞれ地域子育て支援センターがあって、そこで大体一日あたり何人ぐらい受け入れられるのかという数字がたぶん出てきていて、それに開所日数を掛けるような形で出しているはずですが、ここの値は町から頂いた値をそのまま確か載せさせて頂いているはずですが、基本的にはそういうふうにはしか出せない値なので。

目黒委員：ニーズ量と実績・確保方策中、不足数は①-③が大半だが、19ページのみ②-③となっている理由は。

ぎょうせい：不足数をイメージする必要があるかどうかということは国からは何も言われていないが、パッと見て分かるように表示させて頂いた。どこからどこを引きなさいという表明もされていないので、より実態に近いものとか、意味のある方法で出しているため、若干統一されていなかったところがあるかも知れません。

牧野委員：このニーズ調査は国が求めるものでしょうか。

ぎょうせい：最終的には国はこれを作らせたかった、この事業量、見込量、ニーズ量を出させた。それに必要な必須項目というものが国から示されていて、それと若干町の独自の項目を加えている。基本的な調査票の設計自体は国が示したのになっております。

牧野委員：その結果が今ご説明頂いたこの今後のサービス量提供の見込っているところに雄武町のこれから絞ったものだっていう理解でいいですか。あくまでも国が求めている答え、調査をしました。これが全てではないですよ。

ぎょうせい：国が必ず記載しなさいと言っているものは全部載せてます。ここに挙げた項目です。

牧野委員：そういった中に先ほどのサポートセンターとかっていうのは。

中村所長：基本的にここの乗っかっている事業っていうのは国のほうで確保して行きなさいよっていう事業のメニューであって、そのほかのサービスとか色々あると思うんですよ。その辺については求められている部分ではないので、これが全部子育てサービスかと言うとそうではなくて、これはあくまでも最低限求められているということで解釈して頂ければなと思うんですよ。そういった中でさっきちょっとファミリーサポートセンターの話をちょっとしたんですけど、ファミリーサポートセンターとしてまで確保していけるか

どうかもまだちょっとこれから色々こう段階があると思うんですね。いきなりはなかなか新規にできないと思うので、それらに繋げていくようなサービス、ここに載らないようなサービスを入れていくことによって、最終的にはそういう地域で子育てができるような雄武町独自のですね、体制を作っていければなという思いで、ここではファミリーサポートセンターのところに、最終面の所に入れたというのが。ですからこれから皆さんのほうから色々ご意見を頂いた中でより色んなできていくような、町がやっていくべきサービスがあり、地域の方々も協力してもらっていただけるようなサービスもありとか、それとかこういう肉付けされていってっていう風に。

牧野委員：じゃあ今の関係についてはここまでで、このニーズの調査結果というか、まとめたらこういうふうになりましたよっていう捉え方でいいということですね。今後雄武町の関係についての計画が入ってくる段階ではまだまだ子育て中のお母さん方の意見を聞きながら、どういうふうに、ゼロ歳保育ひとつにしても今後はもっと練っていくっていう捉え方でよろしいでしょうか。

中村所長：はい。

ぎょうせい：今のご質問の意図ってというのが、これが計画の全てかっていうような意図ももしあるんでしたら、それはそうじゃなくて、もっと幅広いメニューが本来あって、その中で少なくとも全国で、コアな部分ですね、必ず、できればっていうことでも、できれば全国の自治体で共通に実施して欲しいコアな部分をまず事業量として出して欲しいということで、抽出したものがこの事業ということにはなりますけども、その他色々施策、細かいのあります。ちょっと先走っちゃうとあれなんですけども、もしかすると今のご質問の意図っていうのまたちょっと別の説明がこの後あるんです、それでお分かりになるかも知れないんですけれども、まだそれでも不明な点があれば。

中村所長：流れがあるんでしたら課長、資料9も先にやっちゃいますか。

ぎょうせい：【資料9について説明。】

佐々木課長：資料8、児童数のゼロ歳児の推計、町全体の人口が減少傾向にあるが数字だけ見ると減らない。これは要因があったのか。

ぎょうせい：ある程度自動的に出してしまうことにはなるので、逆にこちらでは弄れない部分がある。ゼロ歳の値の出し方ってというのは25歳から35歳までの女性の人数、人口比率と過去の実際の出生率みたいなものを両方とも考慮したうえで、じゃあ大体25歳から35歳の女性がこれだけいれば大体これぐらいの子供が生まれるだろうというような推計式を地域で出しておりますので、そこの女性の数によってここの値は既定されるので、ここで下がっていないということは比較的この31年まではそこの年代の女性がある程度のボリューム残っていらっしゃるといえることがあるのかなと。

佐々木課長：特殊出生率はどのぐらいで見てるんですか。使わないんですか。

ぎょうせい：特殊出生率そのものは出してないです。特殊出生率を出すにはちょっとまた色々なデータが必要になってくるので。

佐々木課長：ゼロ歳児が減らないっていうのはこれ、10年スパンだったら変わってきますよね。一人二人増えるような感じ。

ぎょうせい：そうかもしれないです。ただですね、一人二人の部分はずいぶん、これ国がワークシートって言うのを出してきて、それに私達はさっきの数値を当てはめてそこからワークシートから自動的にある程度出てくるんですね。そこでは四捨五入の仕方とかがあってというのは国の提供したワークシートによるので、それを見て言いますと四捨五入の仕方によって一人二人はちょっと変わり得ますので、ここを32人から33人に上がったから必ず上がるかっていうと誤差の範囲ぐらいに取って頂ければと思います。

佐々木課長：これ住基から出してるんだよね。ということは中国人カウントされているの。

中村所長：これはカウントしていない。これ3月末人口なんで実は変動が多い時期ではあるんですけど。

佐々木課長：中国人カウントされてないんだ、なくてこの数字が出てくるんだ、うちは。

中村所長：たまたま過去の人口、今回数字はないんですけども、今回参考としたのは平成23年から25年の3ヵ年なんですけども、実は平成22年あたりからほぼゼロ歳さんは横ばい、やっぱり30人台ぐらいの横ばいってことなんですよ。それまでは38人とちょっと多かったんですけども、そこからちょっと下がって、ちょうど子ども園が開設した22年からはほぼ横ばいになっているのが。

佐々木課長：2子、3子の割合が増えてきている。

中村所長：正確には過去と比較はできないのですが、個人的には非常に2子3子さん、要は人口がどうしても減ってるんですよ、年間50人単位くらいでどんどん減っていったらいいんですけども。でもお年寄りの数は若干ちょっと上がっている。子どもは横ばいである。じゃあ誰が減っているのって言ったらやっぱり働いている世代の方が減っているはずなんですよ。そうすると先ほどは子どもを産める女性の方々が頑張っていらっしゃるんじゃないか、たぶん減っているはずなんですよ。じゃないと人口どこで減ってるのっていう話になるので。その割にゼロ歳さんが減ってないっていうことは、僕が思うにやっぱり二子、三子、皆さん雄武町で住んでる出生の数っていうのが増えていて、当然僕が保育所へ来てからも結構兄弟さんがいらっしゃるっていうのが非常に強いので、そういう環境にあるんだなって個人的には分析しています。ただやっぱり働

くお母さん方が、当然人口が減ってきているっていうことは、今度はそれが四子、五子っていくかって言ったら、なかなかそれは厳しいかなとは思っているので、やっぱり31年以降はちょっと減っていくんじゃないかなって個人的には思っています。

佐々木課長：その理論がこの計画の根幹をなすんだよな。子どもを減らさないようにどうするかっていう。

中村所長：だからきっと個人的には、環境的にはきっとある程度雄武町として整ってきているんじゃないかなって個人的な印象があるんです。中では二子、三子が増えていってるっていうのはそういう環境ができてきているんじゃないかなっていうふうに思うんだけど、根本となる産んでくれるお母さん方の世代の方々がやっぱり定住して増えてこない、やっぱり年々減っていくのはしょうがない、っていう対策も、またね、ここだけのピンポイントの施策じゃない施策で必要になってくるんじゃないかなって、個人的にはすいません、思っています。

【その他質疑なく、資料8、資料9についての質疑を終える】

◎自由討議

【牧野委員】

- ・今、実際に子育てをされている若い母親の意見をこういう場で聞かせて欲しい。
- ・保育所、学校、児童センターなど、町としてどうやって育てていきたいか、それを母側の立場から子育てを応援する視点と、子どもがしっかり育つ子育ての視点、両面で考えていけたらよい。

【工藤委員】

・保育所、中学校はそれぞれ1箇所なのにどうして小学校は点在しているのか。自分が通っていた札幌市内の小学校では、豊丘小から雄武小くらいの距離を徒歩で通学していた。統合はあり得ないのか。

(石井課長) 全て統合することがよいのか。まとまればよいという意見の一方で、学校が果たす地域の役割もご理解して頂きたい。地域の意見を尊重しながら進めていく。児童数が少なくなると地域のほうから将来の子供達のためには統廃合して頂きたいという意見も出てくると思われる。地域としての意見と、町としての意見を含めた中で、将来的に統廃合を考えていく。

- ・統合したくないという意見があるのか。

(石井課長) 基本的には有児家庭におかれてはある程度児童数が少なくなる

と、それなりの大きいところに統合させていただきたいという意見も出てくるし、その中では地域の中で自治会という考え方もある。

(内宮係長) 沢木地区から雄武地区へ転居してきた。地域での学校の役割は、そこに住んでいる人は子どもが周りにいる生活というのは非常に大事なもので、子どもの学校が離れてしまうと校外での活動や参観日などに参加することもできず、子どもの様子を見ることができなくなる。また地域ごとに年齢に関係なく集うイベントなど、地域住民同士のつながりというものも大事にされている。

- ・自分の子供は正直、豊丘小学校に通わせたいとは思わない。そういう場合どうしたらよいのか。地域の人と一緒にやるのもいいが、同じ学年の人で集まりたい。

(相坂委員) 経験上、豊丘小学校の話になるが、子どもを2人育てて14年お世話になった。子供の人数は年々ずっと減ってきている。青空保育所がなくなった時は寂しかったし、他世代との交流も減った。現在の小学校は複式学級だが、それなりにやっている。現在は保育所が統合されたが、豊丘地域ならではの色々なことを行っている。子どもが関係しなくなかなか参加する機会がない。小学校も豊丘地区一軒ずつに広報誌を配布するなど交流を図っている。ぜひ一度見に行ってみて欲しい。

- ・行きたい、行きたくないじゃなくて、それはあくまでも周囲の大人達が、子どもがいれば活気付くという話であって、確かに子どもが歩いて通えば可愛いのは分かる。ただ子どもの立場としてはどうか。例えば1年生がひとりだけだったら、自分がその小学生だったらどうなのか。

(新谷補佐) 実際、子どもから寂しいとか別の学校へ通いたいという声はあるのか。親から見てそういう思いなのか。

- ・まだ子どもがいないため分からない。いたとしても4歳や5歳の子に聞いたとしても分からないだろう。一人きりならどうやって体育の授業をするのか。

(相坂委員) 月に1~2回、町内の複式学校全体の交流会がある。

(牧野委員) 子どもの成長によっては、大勢の中で切磋琢磨してライバルがたくさんいる中で自分の力を発揮していけるタイプと、マンツーマンで少ない人数の中で心を育てていけるタイプの子がいる。私は両方に良さがあると思う。

(直井委員) 上の子は沢木小学校。保育所は若草保育所で、そこから沢木小学校へ入るのは2人だけだった。子どもは最初泣いて「なんで僕だけ沢木なの」と言っていたが、一人じゃないのが大きかった。沢木に住んでいるから沢木小学校なんだよ、と何度か説明することで納得したようだ。実際

に通学するようになってから不満は出ていない。たぶん親の気持ちと地域の気持ちは違う。私の地元も小さい町で、やっぱり小学校が何校もあり、中学校が1校、やはり同じ問題が毎年出ている。地域が皆で了承し、皆でそうしようという話にならないと毎年同じ問題が出て、結局学校は残っているし、山村留学で集めるとか地域で考えて、存続させようという考えがあるから難しい。仕事のこともあるかもしれないが、町の真ん中に引越すのはどうか。

- ・子どもの意見より大人の意見ということ。しばらくはどんなに児童数が減っても小学校を無くさないということか。

(石井課長) 先ほども申し上げたとおり、地域の人のご事情も、将来の子供達のご事情も考えなければいけない。最初の段階は地域の中で判断して頂くというのが現在の町のスタンス。基本的には児童数が少ないから将来学力や体力が落ちるとか、大きければ学力や体力が向上しているとかいう訳ではなく、それぞれの地域の学校の先生も頑張っている。

- ・そういうことを思っているわけではない。ただバスケットボールの対戦ができないのはかわいそう。

(石井課長) 団体スポーツについては子供達がかわいそうかなという一端もある。

(豊田課長) 町政懇談会で町長や教育長の答弁に、地域に意向があればその方向を示すという話があった。地域の中で誰かが声をあげていくことも必要ではないか。待っているだけではなかなか動かない。私も豊丘小学校の出身だから当然なくしたくない。どっちが大切かということを経験で結論付けるのであれば止むを得ないのではないか。

【齋藤委員】

- ・自分の子育て時期と比べて、保育の量や保育時間が変わった。親にとっては非常に利用しやすくなった。保育士としては第二子、第三子が増えてきて、ゼロ歳児や1歳児が減らない。
- ・子育て力の低下、離乳にあたり市販のジュースを飲ませてしまう。当たり前が当たり前ではなくなっている。子供だけではなく親も育つことが必要。
- ・一時預かりの拡大化。緊急だけではなく自分のリフレッシュなども受け入れている。

【直井委員】

- ・子育てに関する資料のようなものは配布しているのか。転入してきた人に「どこで遊んでいるか」「どこに集まっているのか」と聞かれる。詳しく書

いたものを配布して欲しい。

(八重樫保育士) 現在は転入者に窓口で資料を配布している。出生届時にも「おめでとうカード」を配布している。また保健師訪問時にも紹介してもらっている。支援センターをアピールするようなガイドブックが必要であると考えている。

【工藤委員】

- ・転入時に町のホームページを見たが、妊婦健診の助成内容など必要な情報が掲載されていない。何もやってくれない町だと思っていた。色々なお知らせを掲載して欲しい。

【目黒委員】

- ・小学5年、中学3年の子がいるが、現状での問題が分からないため、意見できない。自身の育児期には母親が行く場所へ父親として積極的に参加していた。父親がどういうふうに参加できるのかに重きを置いて方針を立てて欲しい。
- ・構成委員の中で現在この問題を真剣に考えられる人が何人いるのか。そこから考えないと論議の進展が図れない。なかなか意見できない。そこを考えられる年齢層をもっと入れて話の活性化を図るべき。
(豊田課長) メンバーを決めるにあたり、開催時間や父親の参加、教育関係者など。ざっくばらんに話ができるよう選んだ。目黒委員については雄武の子育て支援を良く知っていること、PTAも経験されており、色々な人の推薦もあった。それぞれの委員について選定理由はあるが、委員同士の距離を近づけて良い計画を作っていきたい。これからもぜひ積極的に参加していただきたい。
- ・現役ではないためイメージが沸きにくい。意見が出にくい。現場から離れてしまった親としては話し合いの中に参加できない。現役を入れれば活性化するのはではないか。批判ではない。

【北畑会長】

- ・小さい小学校にも大きい小学校にもいいところはそれぞれある。
- ・ファミリーサポートセンターがしっかり構えていないと、利用したい人が行くのは難しいものがある。あつたら行くけどなかったら行けない。
- ・学校と保育所との連携。
- ・第一子を産もうとする人をいかに育てるかが重要ではないか。

(2)その他
特になし

3 その他

次回会議について

- ・次回以降の会議については1月下旬を予定している。後日会長と日程相談の上、連絡する。